

美術の窓 (108)

『あやね竹』を描いた絵本画家・大森善清^{おお もり よし きよ}

大和文華館館長 浅野秀剛

今日、絵本というと、絵が主体の子ども向けの本をイメージするのが一般的であるが、江戸時代は、絵が主体の本全般をイメージするものであった。すなわち、大人向けのものも子ども向けのものも絵本と言っていた。江戸時代の本のほとんどは木版であり、字も絵も一枚の板に彫師によって彫刻され、摺師によって摺られ、製本されるのである。したがって、絵も文字も基本的には同じ工程となる。江戸の版本が絵を豊富に含むのは、絵を入れ易い構造になっていたことが大きいのである。

絵本を含む版本の絵は、いわゆる画家（当時は絵師という）が下絵を描くのであるが、一般向けの絵の多くを浮世絵師が担当したことから、版本の絵の過半も浮世絵師の仕事となった。江戸時代の絵が主体の版本、つまり近世絵本がどのように誕生したかについては必ずしも十分に解明されてはいないが、17世紀半ば、遅くとも1650年代には制作されていたことは間違いない。その頃の絵本画家にどのような人がいたかについては全く分からない。絵本画家として最初に有名になったのは、1670年代から活躍する江戸の浮世絵師・菱川師宣（?～1695）である。京都はというと、近年急速に研究が進んだ大森善清を挙げなければならない。善清の生没年は不明であるが、元禄後期から宝永期の1701～04年頃、少なくとも26種の折帖仕立の絵本を刊行していることは間違いない。上方における最初の絵本画家といつてよい。

善清の絵本のひとつが『あやね竹』である。『あやね竹』は、中国の人物を題材にした24図からなる3帖の絵本で、掲載したのは上巻の「靈昭女・西王母」。靈昭女は中国唐代の隠者龐居士の娘で、禪宗に帰依し、竹籠を売って父を養ったことで知られている女性。西王母は中国西方の崑崙山に住む仙女で三千年の命を保つという仙桃を持つという。その二人を組み合わせた図が唐団扇形の枠に描かれている。左下の枠外に記されている「唐に」の「唐」はこの絵本が唐絵（中国題材の絵）であることを示すもので、「に」は「付」（ページ数に相当）で、い・ろ・は・に…の「に」、第四図目ということである。『あやね竹』は序文の他は全部絵で、合計24図の純然たる絵本である。そのぼつりとした味わいは独得のものがあり、同時代の京都の絵師・西川祐信ほどスマートではなく、江戸の鳥居清信とはさらに違いが際立つ。空気がゆったりと動いているような感覚の画面を作り出しているとでも形容できようか。

善清の絵本の特徴は、この図のように唐団扇形の枠を持つことで、それがあれば善清の絵本と断じてよい。ただし、後摺りのものからは唐団扇形枠がなくなり、

更に後のものは新たに四角の枠が付与されるので気をつけなければならない。最新の研究によると、善清の絵本は、100年以上命脈を保ち、19世紀前期まで刊行され続けたことが判明している。26種の絵本を制作し、しかも100年以上上刊行され続けながら、近年までその全容が分からなかったのには理由がある。それは大多数のものに善清の署名がなかったことと、完全な本がほとんど残っていないことによる。土田衛氏のコレクションであり、現在は大阪府立大学の所蔵になる『あやね竹』は、奇跡的に残った善清絵本の

唯一の完本（正確に言うと修復の際と思われる順序の乱れがある）である。大和文華館は、大阪府立大学と連携を結んでいることもあり、4月5日から5月17日までの「桃山・江戸の絵画」の展覧のなかで特別に展示させていただく。記して感謝するとともに、多くの方が来館し、観覧することを願うものである。



大森善清『あやね竹』より

季刊 美のたより No.166

平成21年4月5日

発行 大和文華館